

孫はパリジエンヌーその③

パリコレ「マヌカン」ト なつた婆々とママ

「&%#&」#1マヌカン」と店員さん。80年代に「夜霧のハウス マヌカン」という流行歌があったのでマヌカンは聞き取れた。

マヌカン (mannequin) とはファッションモデルのことだ。英語読みすればマネキンだが、英語でもフランス語でもこの単語だけでは人体模型の意味はない。ハウスは英語、マヌカンはフランス語なので和製の造語だとわかる。



パリコレのマヌカンと化す婆々とママ。(22年9月 モントルイユの衣料リサイクル店にて)

当然ながら「ハウスマヌカン」はパリのこの店では全く通じなかった。ソラ(孫)の爺々と婆々は、割引シールが貼られるスーパーの食品売り場が大好き。二割、三割引は「割引」と呼ばない。地元スーパー食品売り場では特にだ。日本の食品廃棄量は、日本の年漁獲量と同じ600万トン。また、国連の途上国への年間食糧援助とも同量だ。食品業界には「3分の1ルール」があるため、多くの食品廃棄物を出す。廃棄される食品の多くは事故なく食べられる。賞「味」期限が過ぎても、物によっては半年以上可能だ。以前5年だった缶詰は法改正で賞味期限が3年とされただけなので、数年は飲食可能だがこのルールで廃棄となる。「3分の1ルール」については紙巾もあるのにお調べいただきたい。

食品以上に問題なのが衣類で、毎年新品で15億着、古着に至っては三千億着が廃棄されている。近年、衣類のリサイクルが青山、はるやまなど「山服店(若い人はそう呼ぶらしい)」で行われてはいるものの、開発途上国の劣悪低賃金な労働環境で生産された衣類を格安で提供するファストファッションと呼ばれるアパレル店ではこれからだ。ファッションの国フランスでは流行という「クソどうでもいい仕事(資本論)」を作り出し、日本同様大量に売れ残った衣類が出る。しかし、近年のSDGsの流れもあり、22年1月から最大約200万円の罰金を伴う「衣服廃棄禁止令」が世界で初めて施行された。

あることだ。半額のシールが大好きな爺々と婆々はそんな店を廻る。22年9月のある日、いつも娘がお世話になってる衣料品店に行く。日本と言うNPO法人が運営する店だ。「ギズ」がなければロゴを入れてシヤンゼリゼの高級店で売られるような品が並ぶ。

「マヌカン」と化す。そのランテアの交代制だとして、両手いっぱいこの店員さんにはボ

「パリコレファッション」を抱えて帰宅する。食品にとどまらず衣類も法律を作っても廃棄することなく必要とする人に格安で届けるのがフランス流だ。翻つて日本では…。山服店などアパレル店に任せただけで衣料リユース、リサイクルが普及するだろうか、と思うのは爺々だけか。(高橋哲也)

高退協読書会案内

2月例会は「『日本』ってどんな国?—国際比較データで社会が見えてくる」本田由紀著を課題本に樋口勇雄、高橋泰宏、小島真子、内純一、青木晴男、山本晶子、大川法由記の7名で行われました。4月例会は以下のように行われます。参加希望者は直接お越しください。お問い合わせは上記参加者のいずれかにご連絡ください。

第191回(4月例会)4月13日(木)14:00~ムトー荘 2F(205号室) 参加費 600円(会場使用料) テキスト「ヒトの壁」(新潮新書)養老孟司著



[著者紹介]養老孟司1937年~は、日本の医学者、解剖学者。東京大学名誉教授。医学博士。神奈川県鎌倉市出身。2003年に出版された『バカの壁』は450万部を記録し、第二次世界大戦後の日本における歴代ベストセラー5位となった。小児科医の母に育てられた。東大医学部卒。東大大学院基礎医学で解剖学を専攻し、博士号を取得。『ヒトの見方』(1985)から、一般向けの文筆活動を開始。身体と人間の諸活動との関係を考察する評論を幅広い分野で展開する。人のあらゆる営みは脳の構造に由来するという「唯脳論」を提唱。現代社会への痛烈な批判も多い。昆虫採集に経済・環境・教育問題などを解くヒントが詰まっているとも説く。(Wikipedia)

[本書説明]病気はコロナだけじゃない。そして、死は誰にでも平等にやってくる。新型コロナウィルス禍と五輪、死の淵をのぞいた自身の心筋梗塞、愛猫まるの死—ヒトという生物であると実感し、2年間の体験からあらためて問い直す。人生そのものが、不要不急ではないか。それでも生きる価値はどこにあるのか。84歳の知性が考え抜いた、究極の人間論!